主知主義と現象学の関係：

デカルト、ラニョー、メルロ＝ポンティにおける『非反省的なもの』に即して

山本りりこ

序

知覚はいかにして成立するのかという問いは、哲学が何を語りうるのかを理解するうえでも重要な問いである。フランスでは一八世紀から一九世紀にかけて生理学が発展し、以降は知覚論も医学的・生理学的所見を取り入れながら論じられるようになる。一方で、注意や判断という精神のはたらきを強調し、精神にイニシアチブを与える伝統的な知覚論も根強く存在し続けた。知覚についての問いは、生理学や医学が発達してもなお探求が続けられる問いであり、この探求の営みのうちには、人間が生において何を重視するのかという根本的かつ普遍的な問題意識を垣間見ることができる。

本論では、メルロ＝ポンティ（一九〇八―一九六一）が『知覚の現象学』[1]で主知主義の知覚についての反省的

分析を批判的に論じる箇所を手がかりに、主知主義による知覚の反省的分析における判断の位置付けを明らかにする。メルロ＝ポンティの主知主義批判は主に、主知主義の知覚論が知覚＝判断という構図をとることで非反省的な事柄を取り逃しているという指摘から成る。本論では知覚における判断についての記述に着目し、メルロ＝ポンティのテクストとデカルトの『省察』[2]及びラニョーの『名講義集』所収の「知覚についての講義」[3]のテクストとを突き合わせ、主知主義の知覚論の輪郭を明確化する。[4]

知覚論は往々にして現象学以前／現象学以降という分断のもとに語られるが、本論ではそうした単純な線引きを行うことを目指すのではなく、むしろ主知主義の哲学のうちに萌芽的に含まれていた、現象学的な問題意識へとつながる記述を読み解くことを目指している。メルロ＝ポンティのテクストは、主知主義から現象学へと向かう際、どのような点が共通の問題意識として引き継がれていったのかを理解する一助となる。

具体的な論に入るに先立って、メルロ＝ポンティのテクストの位置付けとそこで展開される主知主義の知覚の反省的分析への批判の射程を確認しておく必要があるだろう。『知覚の現象学』序論の第三節「〈注意〉なるもの、および〈判断〉なるもの」は、第一章以降でメルロ＝ポンティが現象学的な観点から知覚を具体的に論じるにあたり、現象学が前世代の知覚論から受け取った課題や、乗り越えるべき点が明確に記された箇所である。ここでは主に知覚＝判断とする主知主義の反省的分析が批判対象として挙げられるが、一言に「主知主義」といっても、メルロ＝ポンティがとりわけ着目するのはデカルト（一五九六―一六五〇）とラニョー（一八五一―一八九四）の知覚論である。このふたりに焦点を当てるのは、メルロ＝ポンティが自ら彼らを主知主義の枠組みに収める一方で、彼らのテクストのうちに絶対的な意識の下にある非反省的なものの存在を読み取ったからに他ならない。

そのため、主知主義の知覚についての反省的分析に対するメルロ＝ポンティの指摘には、批判的な指摘と肯定的な指摘の二つの側面がある。

批判的な指摘は、知覚＝判断とすることで、知覚の出発点であった感覚や感性的光景、見えている現象そのものに意味を与える始原的な作用、さらには知覚している私を捉え損なうことになる、というものである。一方で、先に述べたとおり、主知主義の中でもデカルトやラニョーの知覚論には、非反省的なものについての記述が認められるという肯定的な指摘もされている。メルロ＝ポンティは、非反省的なものを積極的には認めることができない反省的分析のあり方に対して批判的な立場を取る一方で、積極的にではないが非反省的なものを認めようとしていた主知主義の姿勢には肯定的な評価も与えていたのである。

一　反省的分析における判断と非反省的なものの関係
―デカルトの『省察』へのメルロ＝ポンティの批判から―

第一章では、デカルトの反省的分析についてメルロ＝ポンティが指摘する箇所を取り上げる。主知主義批判の文脈において、メルロ＝ポンティはラニョーをデカルトの知覚論の系譜に属するものと位置付ける。そのため、デカルトがどのような論を展開し、それに対してメルロ＝ポンティが何を指摘したのかを把握しておくことは、二章で扱うラニョーの知覚論を理解する一助にもなるだろう。

一―一　判断の担う役割および知覚＝判断とする反省的分析の問題点

本節では、デカルトの『省察』の記述に対するメルロ＝ポンティの指摘をもとに、知覚＝判断とする反省的分析が何を捉え損ねるのか、そして知覚＝判断という構図において判断はどのような役割を担うのかを明確化する。

「第二省察」においてデカルトは、火を付ける前後の蜜蝋では色や形、香りや固さなどに相違があるものの、なぜひとはそれを同じ蜜蝋として認識しうるのか、そして窓からみえる人間たちは帽子と衣服を羽織っているのに、なぜひとはそれを衣服を纏った自動機械としてではなく人間であると判断できるのかという問いをたて、これらの認識の根拠に判断を措定する。「目で見ていると思っているものを、私の精神のうちにある判断によってのみ理解している」[5]という文言が示すとおり、デカルトの知覚論では「見ている」対象それ自体よりも、それらをどのように判断するのかという点に重点が置かれるのである。[6]メルロ＝ポンティはデカルトのように知覚とは判断することだ、とする立場をとる場合に見落としてしまうもの、および知覚＝判断という構図で知覚を理解する場合、判断が担う役割は次のようなものになると指摘する。

> 〔デカルトの〕蜜蝋の断片についての有名な分析にしても、匂いや色や味の性質から出発して、それ自身やはり知覚された対象の彼岸にある無限の形態と位置の能力といったものにまで飛躍してしまったし、こうして物理学者の対象としての蜜蝋しか定義しなかった。……今私が窓から見ている人間たちは、彼らの帽子やコートによって隠されており、彼らの像は、私の網膜の上に映し出されているはずはない。ゆえに私は、彼

らを見ているのではなく、彼らがそこにいると判断しているわけだ。……このようにして知覚は、感性が身体的刺激に応じて提供してくる諸標識についての一つの〈解釈〉だ、精神が「それら諸印象を自らに説明するために」作り出す一つの〈仮説〉だ、ということになる。[7] ところがその判断の方も、知覚が網膜上の印象を超えていることを説明するために導入されたものだが、もはや真正な反省によって内面的に把握された知覚作用そのものであることはやめて、身体の提供せぬものを提供する任を持った、知覚の単なる一〈因子〉（facteur）となってしまう。[8]

知覚は精神のはたらきである判断によって成立する、ないしは知覚とは判断（＝解釈）である、と断言することは、対象を知的構成の産物として絶対的に位置付けることに他ならない。このとき判断が担っているのは、知覚を可能にするのに感覚には欠けているもの、すなわち網膜上の印象には汲み尽くされない部分を説明するための「仮説」を提供することである。

ここで問題となるのは、こうした主知主義の知覚論では「感覚すること」それ自体を捉え損ねるという点である。先の引用に続く箇所でメルロ＝ポンティは、知覚主体および私以外の知覚主体の精神にも妥当するような仮説を立てることを目指す「判断」と、現れそれ自体に身を任せ、それ自体を所有したりその真理を知ろうとしたりはしない「感覚」とが、主知主義の知覚論においては渾然一体となっていることを指摘する。[9] 主知主義の知覚論は、単に感覚で尽くされないところには常に判断があると措定することで、あらゆるところに判断が存在することを示唆し、それによって現象それ自体を否認するにいたるのである。[10]

主知主義の知覚論において知覚の働きを明らかにするために置かれたものであった判断は、仮説を立てる役割を担うことによって「知覚の一〈因子〉」、すなわち知覚の構築要素でしかなくなってしまう。[11] デカルトの知覚の分析では、精神がもろもろの所与のうちから少しずつ全体の意味を見出していくはたらきに重点が置かれるが、メルロ＝ポンティが重視するのはむしろ、もろもろの所与をむすびつける意味さえも一挙に想像してしまう作用、所与が意味を持つという事実をも可能にするような作用（＝知覚の原初的な作用）[12] を解明することにある。主知主義が感性的なものの意味を読み取ることに専念した一方で、メルロ＝ポンティはその一歩手前にある、そもそも感性的なものが意味を持つのはなぜなのか、という問いへとさらに歩みを進める。主知主義は現象学にとって「乗り越えるべきもの」というひとつの意味を有しているが、次節ではさらに、主知主義の知覚論において現象学的問いと根底でつながる問題を取り上げていく。

一―二　反省的分析における判断と非反省的なものの関係

先の節ではメルロ＝ポンティの主知主義が知覚＝判断とすることで何を見落とすのかを批判的な考察を手がかりに探ったが、本節ではそういった主知主義の知覚論において非反省的なものがどのように扱われてきたのかを明らかにする。ここではメルロ＝ポンティがデカルトの主知主義批判における、ある種の肯定的な記述を垣間見ることができる。

メルロ＝ポンティはデカルトの「第六省察」に着目し、デカルトの知覚論においては、判断は知覚を真に構成するものとしてではなく再＝構成[13]するものとして考えられていた点、そして判断が自然の贈与として考えられて

いた点を指摘する。

知覚とは一つの判断だが、しかしその根拠を知らない判断だ、[14]ということは、けっきょく、知覚された対象はその可知的法則性をわれわれが把握するのに先立って、すでに全体として、統一体として与えられているということ、蜜蝋は初めから一つの柔軟で変わりやすい延長物ではないということを意味している。自然的判断は「いかなる理由をも考えたり検討したりする暇を持たない」と語ることでデカルトが了解させようとしたのは、判断の名の下にデカルトが知覚されたものの意味の構成を目指したのであり、この意味というのは知覚そのものに先立ってあるものではなく、かえって知覚されたものから由来したもののように思われる、[15]ということである。[16]

このようにして考えると、デカルトの反省的分析において蜜蝋の断片の可知的法則性および可知的な構造は絶対的な判断によって構成されたものというよりも、われわれが既に統一体として与えられていた法則性や構造を再＝構成したものだということになる。メルロ＝ポンティが指摘するように、「了解作用は非反省的なものに対する反省としておこなわれるのであり、それは事実上でも権利上でも非反省的なものをすっかり汲み尽くしてしまうわけではない」[17]ということをデカルトは一方では理解していたのである。

しかし他方で、こうした判断以前に「全体として、統一体として」与えられた非反省的なものは、主知主義においては反省によってのみ明らかになることから、反省の外にある不可知の項として措定されることはない、と

いう矛盾を含んでいる。不可知的なものは反省によって遡行的に了解され、結局それは不可知の項として反省の外に措定されることはない。全ては反省によって絡め取られ、判断という項目のうちに汲み尽くされてしまうのである。

デカルトの知覚論におけるこうした矛盾は、何を意味しているのか。メルロ＝ポンティは「第二省察」と「第六省察」における記述の相違からもこの問題に取り組んでいる。第一節で既に見たように、「第二省察」では蜜蝋を例に挙げながら、物体の本質は感覚や想像ではなく、精神の洞察（＝判断）によってのみ明証的に認識されることが示される。ここでは感覚的なものは懐疑に付すべきものであり、知覚することは判断することであることが明確に断言されていた。一方で、「第六省察」では様相が異なり、純粋悟性の明証性が揺らぐような記述が散見される。[18] 例えば、「第二省察」では明確に懐疑の対象であった感覚的なものは、必ずしも全てが懐疑に付すべきものではない、とされているのである。

> しかしいまや、私自身と私の起源の作者とをよりよく知り始めるに及んで、私は、感覚から得ると思われるもののすべてを軽々しく認めるべきではもちろんないが、しかしまた、そのすべてを懐疑に付すべきでもないと考える。[19]

こうした記述の変化は、「第六省察」の最終文にもみてとることができる。「第六省察」は「行為すべきことがらの必要性は、そうした綿密な吟味の猶予も許すわけではないので、人間の生活が個別的な事物に関して、しば

しば誤謬に陥り易いことを告白しなければならず、われわれの本性の弱さを承認せねばならない」[20]という言葉で締めくくられている。この箇所は竹内芳郎が指摘するように単にデカルトの弱みとして理解するのではなく、デカルトが純粋悟性の明証性を貫こうとしながらも、そこからはみ出す〈生の世界〉を無視すまいとしたところに注目すべきであり、メルロ＝ポンティはこうした記述のうちに、他の主知主義とは異なるデカルト哲学のある種の偉大さを見出していたと解するべきである。[21]

デカルトの哲学は精神による判断の明証性を強調する一方で、自らの知覚論では取り逃す可能性のある非反省的なものを明確に認めていたが、非反省的なものがけっきょくは反省のうちに収められてしまう、という矛盾が生じていた。メルロ＝ポンティはデカルトが非反省的なものを認めながらも深く言及しなかった点を指摘しているが、こうした矛盾を含むデカルトの哲学が現象学の問題意識を深める役割を担うものであることを認めている。

二　主知主義の知覚論における判断と身体の関係
―ラニョーの「知覚についての講義」へのメルロ＝ポンティの批判から―

第二章では、メルロ＝ポンティがデカルトに続いてラニョーの知覚論に言及した箇所を取り上げる。ラニョーの知覚論の特徴は、感覚印象という極めて身体的な項を知覚論に取り入れる方法を模索しながらも、デカルトと同様に知覚＝判断という構図を採用することにある。第一節ではラニョーの知覚論において身体的な感覚印象が判断との関係においてどのように位置付けられていたのかを、第二節ではメルロ＝ポンティの指摘を参照しながら、知覚＝判断であることをラニョーがどのように立証しようと試みたのかを探っていく。

二―一　図形の立体視における判断と身体性

メルロ＝ポンティとラニョーが共通して取り上げる問題のひとつに、立体視の問題がある。ラニョーは描かれた立体図形を立体として知覚することができるのは、視覚の運動とそこから導かれる感覚印象の「予見（prévoir）」をおこなうためであると考える。

> われわれがみている対象から離れていると思われるとき、問題となるのは触覚とは関係のない判断である。それ〔判断〕は、いくつかの触覚の感覚印象はある運動の条件のもとで獲得されうる、ということを示している。……視覚的延長の奥行とは、わたしがもろもろの形を踏破する（parcourir）距離の諸しるし（signes）として理解するよう習得したところのものであり、仮にわたしがそれらを踏破したらわたしが抱くであろう諸感覚印象（sensations）[22]である。われわれはみることを習得せねばならず、また、運動によって〔そのことを〕習得せねばならない[23]。

立体視を可能にする三次元的な知覚（奥行、距離、方向の知覚）を成立させるのは視覚の「運動」であり、その運動はわれわれが仮にその面の上を歩いたときに抱くであろう感覚印象、あるいは触れたときに手が行き来するであろう距離についての感覚印象を生じさせる。しかしそこで出来するのは、「触覚の判断とは関係がない」とされているとおり、あくまで視覚的な「運動」に基づく感覚印象であり、われわれの手や身体の運動そのものを

介したものではない。視覚的な運動とは、みている対象の上にわれわれが予見（prévoir）[24]する運動である。予見とは、みずからに感覚印象を与える術を知ることであり、それは同時に諸しるしを読み取ることを意味している。ゆえに、感覚印象の予見とは実際の触覚や身体の運動を抽象化したものと考えられる。

さらにラニョーは、立体図の面を「運動の可能性の総体」と位置付け、面が視覚の運動が働く場であることを明確化する。

> 面は諸運動の可能性の総体として理解される。つまり、諸運動が描くであろう諸次元の体系として解釈されうる。面における延長とは、こうした面の諸点をつなぐ位置関係の体系でなければ何であろうか？しかし、そうであれば、いかにしてこうした諸位置は諸点をむすびつける観念的な線が実現するような諸運動の手段とは別の仕方で決定されうるのか。面の上の諸距離とは、われわれが以後それを表象し踏破できるよう、踏破しておかねばならないところの距離である[25]）。

われわれは視覚によって、描かれた立方体とそこから立ち現れる抽象的な関係を読み取っている。前者は視覚にとってある種の「純粋な」像であるが、後者なくして対象のより正確な把握は成立しない。対象の正確な把握は、点と点の位置関係をよみとる運動（＝われわれがその面の上を踏破したら抱くであろう感覚印象の予見）に支えられている。われわれは視覚的運動を介して、眼によって対象に触れることが可能になる。この点で、視覚は触覚の感覚と協働的な関係にあるともいえるだろう[26]。

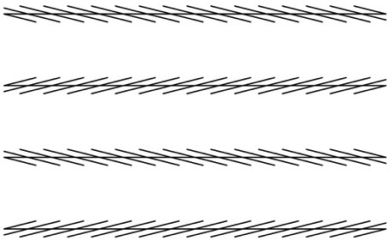
われわれが抱くであろう感覚印象とは、点Pから点Qまで指でなぞったらどのような感覚印象を抱くか、という身体感覚に即した尺度である一方で、関係の体系を読み取るという抽象的なものでもある。ラニョーの視覚論における抽象的な認識や判断は、あくまでも身体的な尺度のうえに成立しているといえる。こうした記述からは、判断を身体的感覚と密接に結びつけることで、ラニョーが心身二元論に陥ることを回避すること、感覚印象という対象との関係によって生じるものを取り逃すまいと試みた痕跡を認めることができる。

二―二　錯覚と判断の関係および、反省的分析と非反省的なものの関係

先の節ではラニョーが身体的な感覚印象を判断と結びつけることで、身体性を無視しない論を組み立てようと試みていたことを見てきた。翻って本節では、ラニョーが最終的には判断を知覚の構造の最上位に位置づけたことで捉え損なうものがあることを、メルロ＝ポンティの指摘から考える。

メルロ＝ポンティは、ラニョーがツェルナー錯視と立体図形を例に錯覚は判断の誤謬である、と考える点を批判的に取り上げる。錯覚を判断の誤謬と位置付ける論は、誤謬が生じうるのは知覚が無媒介的なものではなく判断を媒介としているからに他ならない、という解釈から成立している。

ツェルナー錯視とは、主線である平行線に補助線が引かれた図を見る際に、平行である線が互いに傾いて見える視覚の錯覚である（下図参照）。



ツェルナー錯視の図[27]

ラニョーはツェルナー錯視について、「平行な諸直線は斜めに分割する別の諸線の効果によって、互いが遠ざかるように見える錯覚について言及せねばならない」[28]と述べ、確かにそこでは平行線が平行ではないように「見える」ことを認めたうえで、その知覚は誤謬であると断定する[29]。こうした判断の誤謬の原因は、「角度の知覚は、比較に基づいているのと同様に、ある角度と別の角度を構成する諸線の関係に基づいている」[30]ためだと説明され、錯視は図における線同士の関係によって惹起されると結論づけられる。つまり、錯覚に陥ったのは図の中で各線がとる位置関係に起因する何らかの作用によって、判断が誤謬を犯したためだと説明されるのである。さらに、こうした錯覚はラニョーにおいて、知覚に判断が介在していることを傍証するものとして位置付けられる。仮に判断が無媒介的なものであるならば、そこに誤謬などは存在するはずはないと考えるためである。

> 無媒介的なものと見做されうる知覚においては、いかなる錯覚も場所を持たない。本質的な錯覚の研究は、そのような知覚〔無媒介的な知覚〕は存在しない、ということを示している。知覚することとは、常に痕跡として深く感じたり、被ったりすることとは別のことである。それはつまり、ひとが感覚した時に、ひとが実在すると判断する何かしらについて肯定することである。故に、われわれは再度、知覚とは暗黙の判断抜きには存在しない、と考えるように誘われている[31]。

メルロ＝ポンティはラニョーのこの主張に対し、主知主義的な錯覚の理解は、主線が互いに傾きあっているのを〈見る〉にもかかわらずそれを誤謬に還元してしまうことであり[32]、錯覚＝誤謬とすることは、誤謬が生じた原

因を真に探求することを不可能にしてしまうと指摘する。

〔主知主義のツェルナー錯視についての説明は〕すなわち、私が主線自体を相互に比較しないで、補助線および補助線と主線との関係に干渉を与えてくるところから一切が起こったのだ、というわけである。けっきょく、私は〔二本の主線を比較せよという検者の〕指令を誤って受けとり、主要素だけを比較するかわりに、〔補助線までを含めた〕両者の全体を比較したのである。そこで、ではなぜ私が指令を誤って受けてとってしまったか、という問題が残るであろう。……補助線を受け入れることによって、両主線が平行であることをやめたこと、両主線は平行だという意味を失って別の意味を獲得したということ、補助線が図形の中に一つの新しい意味を持ち込み、それ以来この新しい意味がこの図形のなかを徘徊し、もはや図形から切り離せなくなってしまっているということ、このことを認めねばなるまい。図形に附着したこの新しい意味、現象のこうした変貌こそが判断の誤りの動機であり、いわばこの判断の背後にあるものである。同時に、これこそが判断よりは手前のところで、しかし性質ないし印象より彼方のところで、〈見る〉という言葉に意味を与えているのであり、ふたたび知覚の問題を露呈させるのである。(33)

メルロ＝ポンティはここで、錯覚を生じさせる原因は判断そのものだけにあるのではなく、むしろ判断よりも手前のところに存すると考える。「図形に付着したこの新しい意味、現象のこうした変貌こそが判断の間違いである」という表現からも看取できるように、メルロ＝ポンティは主線が「傾いているようにしか見えない」よう

な見え方が現に生じていること自体を認め、図が自らをそのような見え方のもとに組織化する作用を探求しなければならないと考えていた。錯覚を判断の誤謬とするとき、主知主義の分析は、主線が並行となりうるような一つの印象の層と、補助線を干渉させることによって印象を変容させ、主線間の関係を狂わせるような二次的な作用とを観念的に想定しているに過ぎない。[34]

立体図についても、両者はツェルナー錯視の場合と同様の主張を展開する。ラニョーは立方体のような立体の外観について、人がどの面がこちら側に向かって張り出していると見るかは、人が採用する解釈に従って恣意的に変化されるものであるとする[35]一方で、メルロ＝ポンティはここでも図をどのように見るのかは、図それ自身のうちに設定されたものであり、われわれはそのように見るように動機づけられていると考える。

> 紙上に描かれた立方体は、一方から、上から見て描かれるのか、他方から、下から見て描かれるかによって、様子をかえる。それがふたとおりに見られ得ることを私が知っている時でさえも、図形が構造を変えることを拒否することがあるし、〔構造を変えるはずだという〕私の知識が直観的に実現されるのに時間を要するということもある。ここでもまた、判断するとは知覚することではない、と結論するべきであろう。けれども、こうした感覚と判断との二者択一のために、図形の変化は、もともと刺激と同様に恒常的なものである〈感性的要素〉には依存しないのだから、ただ解釈上の変化だけに依存することができるのだといわざるを得ないし、けっきょく、「精神の概念化作用が知覚そのものを変様させる」、「外観が命令に従って形態と意味を取るようになる」と言わざるを得なくなる。[36]

ここでの指摘は、第一章でのデカルトへの批判と同様、知覚＝判断とすることの問題点を示している。さらに、こうした問題に陥るのは、主知主義は感覚か判断かの二者択一の枠組みの中で知覚論を考えるからであるとされている。第二章第一節においてラニョーは身体的な感覚印象を判断と密接に結びつけようと試みていたことを確認したが、それでも最終的にはやはり判断の方をより重視する。このことは、感覚印象もそれだけではわれわれに知られることはなく、反省や判断という行為によってのみ到達し得るものとして考えられていたことに原因を持つ。ラニョーの知覚論においても、デカルトと同様、感覚や現象の現れそれ自体は、あくまでも遡行的に把握されるものという特徴を有している。

いかなる知覚的分析も、現象野としての知覚を否認してしまえば、分析としての自分自身を否認することにならざるを得ない。また、無限の思惟が知覚に内在していることが見出されるにしても、認識の頂点などではなくて、逆に無意識の一形態でしかないのだ。反省の運動は目標を通り越してしまっているようだ。というのも、知覚対象が秘められた生命によって生気付けられ、統一体としての知覚が絶えず自ら解体しては再形成したりしているのが現実なのに、反省の運動はいきなり凝固化され決定された世界から亀裂のない意識へと、われわれを運んでいってしまうからである。[37]

メルロ＝ポンティは主知主義が知覚論の中で中心的には論じなかった、あるいは論じようとしながらも取り逃

してしまった非反省的なものを、現象がまさに今・ここで生じている現象野において論じることを目指していたのである。

結

本論では、デカルトとラニョーの知覚についての反省的分析についてのメルロ＝ポンティの指摘を取り上げながら、主知主義と現象学の知覚論の構造を明確化した。

第一章では、デカルトの『省察』で展開される知覚論について、メルロ＝ポンティが指摘した箇所を実際のデカルトのテクストと突き合わせながら確認した。そこでは、メルロ＝ポンティが主知主義の知覚論が知覚＝判断とすることを批判的に考察しながらも、非反省的なものを無視しまいとした態度を肯定的にも捉えていたことが読み取れた。

第二章では、ジュール・ラニョーの「知覚の現象学」で展開される知覚論の特徴を示した上で、メルロ＝ポンティからの批判を取り上げた。ラニョーの知覚論は、判断が感覚印象という極めて身体的な項に密接に結び付けられる特徴を有している一方で、最終的にはデカルトと同様に判断を強調することで、今・ここで生じている現象を捉え損なうことをメルロ＝ポンティを参照しつつ示した。

デカルトとラニョーにおいて共通していたのは、判断が感覚に欠けているものを補足する役割を担うこと、そしてそれによって判断は知覚の働きを啓示するものとしてではなく知覚を構成する要素の一つになってしまう、

という点であった。メルロ＝ポンティはこうした主知主義が陥る問題点を指摘しながらも、デカルトやラニョーを主知主義の中でも「絶対的意識の下に探求すべきものがあることを、いつも感じていた」[38]者として取り上げていた。

本論はこうしたメルロ＝ポンティの記述をもとに主知主義と現象学両者の主張を比較することで、主知主義が単に現象学の批判対象としてではなく、のちに現象学が着目する問題を萌芽的に含みもつものであったことを示唆している。

参考文献

Descartes, René, *Œuvres complètes VI-1 Méditations métaphysiques*, Gallimard, 2018.

Lagneau, Jules, *Célèbres leçons et fragment*, PUF, 1973.

Merleau-Ponty, Maurice, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945.

木田直人『ものはなぜ見えるのか　マルブランシュの自然的判断理論』中公新書、二〇〇九年。

小林道夫『デカルトの哲学の体系　自然学・形而上学・道徳論』勁草書房、一九九五年。

デカルト、ルネ『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、二〇一五年。

ビラン、メーヌ・ド、『人間の身体と精神の関係　コペンハーゲン論考一八一一年』、F.C.T. ムーア校訂・編集、掛下栄一朗監訳、早稲田大学出版部、一九九七年。

メルロ＝ポンティ、モーリス『心身の合一―マールブランシュとビランとベルクソンにおける―』滝沢静雄他訳、筑摩書房、二〇〇七年。
メルロ＝ポンティ、M・『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、二〇一五年。
メルロー＝ポンティ『知覚の現象学1』竹内芳郎、小林貞孝訳、みすず書房、一九六七年。
メルロー＝ポンティ『知覚の現象学2』竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、みすず書房、一九七四年。
山本りりこ「ジュール・ラニョーにおける奥行知覚　メルロ＝ポンティによる批判の再検討」『メルロ＝ポンティ研究』第二五巻、二〇二一年、五五―七二頁。

註

（1）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. メルロ＝ポンティ『知覚の現象学1』竹内芳郎、小林貞孝訳、みすず書房、一九六七年。メルロー＝ポンティ『知覚の現象学2』竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、みすず書房、一九七四年。M・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、二〇一五年。

（2）René Descartes, *Œuvres complètes VI-1 Méditations métaphysiques*, Gallimard, 2018. ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、二〇一五年。

（3）Jules Lagneau, *Célèbres leçons et fragments*, PUF, 1973.

（4）主知主義の知覚論における身体の不在性の問題を扱った論文としては、拙論「ジュール・ラニョーにおける奥行知覚　メルロ＝ポンティによる批判の再検討」（『メルロ＝ポンティ研究』第二五巻、二〇二一年、五五―七二頁）がある。ここでは、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』においてジュール・ラニョーが「知覚について

の講義」で展開した奥行き知覚についての論を批判的に論じた箇所をとりあげ、その批判の妥当性を検証している。

（5）René Descartes, *Œuvres complètes VI–1Méditations métaphysiques*, Gallimard, 2018, pp.131-133. ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、二〇一五年、五四―五五頁。

（6）「第二省察」第一一―一六節参照（René Descartes, *Œuvres complètes VI–1Méditations métaphysiques*, Gallimard, 2018, pp.122-135. ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、二〇一五年、五一―五七頁）。

（7）〈仮説〉および〈解釈〉という語はメルロ＝ポンティによって注が付され、ラニョーからの引用であることが示される（Jules Lagneau, *Célèbres leçons et fragments*, PUF, 1973, p.179からの引用）。デカルトをとり上げながら反省的分析を論じる箇所でラニョーやアランのテクストからの文章をひく、という構成が「〈注意〉なるもの、および〈判断〉なるもの」では散見される。こうした引用の仕方からも、デカルト、ラニョー、アランが思想的に類似する立場をとるものとして理解されていたことが窺える。

（8）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, pp.41-43. 以下、『知覚の現象学』の邦訳は竹内芳郎他訳および中島盛夫訳を参照しつつ、新たに訳出した。〔 〕内は筆者による補足。

（9）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, pp.43-44.

（10）メルロ＝ポンティは主知主義がこうした論に陥った要因の一つに、主知主義の「意識の過剰さ」を挙げる。メルロ＝ポンティによると、主知主義と経験論は注意の概念の理解において相互に異なる立場をとるが、両者は結果的に共通の問題を有している。主知主義が乗り越えようとした経験論は、タブラ・ラサに外部から書き込まれる受動的な意識であり、意識が「貧弱すぎる」ことが問題であったのに対して、主知主義は外的世界にも自らの意識しか見出すことができないという点で意識が「豊かすぎる」ことが問題である。両者は意識が貧弱すぎるか豊かすぎるかという点では異なるものの、ともに「学びつつある意識」を捉え損なうという点では一致している（Cf., Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, pp.33-37）。

（11）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, pp.42-43.

（12）*Ibid.*

（13）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, p.53.

（14）第六省察第六節（René Descartes, *Œuvres complètes VI-1Méditations métaphysiques*, Gallimard, 2018, p.215. ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、二〇一五年、一一五頁）。

（15）*Ibid.*

（16）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, p.52.

（17）*Ibid.*, p.89.

（18）「第六省察」が「第二省察」に比べて曖昧な印象を与える要因のひとつに、心身分離論と心身結合論が同居する形をとっていることが挙げられる。デカルトは「第六省察」で心身は実在的に区別されると述べながらも（八節）、心身が極めて緊密に合一している（一三、一四節）とも述べるため、「心身複合体としての私」に与えられた自然を明らかにしたいのか、あるいはそれが明晰判明なものではないことを主張したいのかが曖昧になっている。心身分離論と心身結合論の同居は、エリザベート宛の書簡にも見受けられる。

（19）René Descartes, *Œuvres complètes VI-1Méditations métaphysiques*, Gallimard, 2018, p.219. ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、二〇一五年、一一七頁。

（20）*Ibid.*, p.248. 同上、一三三―一三四頁。

（21）モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学1』竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、みすず書房、一九六七年、三三四頁参照。

（22）感覚印象とは、直観と同じく表象の契機となるものであり、知覚や認識に先立って存在する。感覚印象は、対象とわれわれ自身とのかかわりのうちで構成されるものであり、われわれのうちに生じる変化のことである。感覚印象だけではわれわれに何も知らせることはなく、われわれがより高次の知覚や認識において感覚印象を解釈することで、意味を有するようになる。また、感覚印象は「最初の知的印象」であるといわれるが、それは知覚や認識に発展しうるものとして、あるいは知覚や認識が成立したときに反省的に理解されるものであるためだ。感覚印象はそれ自体で知的であるというよりむしろ、知的な段階を萌芽的に有していると同時に、知的な段階において初めて理解されるものとして位置づけられているのである。純粋な感覚印象は存在しえない、

といわれるのもこのためである。感覚印象についての判断がなければ、われわれは知覚、認識することはない。また、われわれが何らかの変化を被ることで感覚印象が惹起されることから、精神が外的世界との交流を開始するひとつの条件ともされているようである（Réf., Jules Lagneau, *Célèbres leçons et fragments*, PUF, 1973, pp.133-134, 139, 143, 162-163）。

（23）Jules Lagneau, *Célèbres leçons et fragments*, PUF, 1973, p.148. 以下、ラニョーのテクストは拙訳。〔 〕内は筆者による補足。

（24）*Ibid.*, p.129.

（25）*Ibid.*, pp.148-149.

（26）視覚と触覚の協働関係を認める考えは、ラニョーに影響を与えたメーヌ・ド・ビランの『人間の身体と精神の関係』の記述にも見出せる。「人間は、視覚と触覚によって外的自然にじかに触れる。視覚と触覚は、人間の身体組織における真に支配的な感覚である。また、われわれは、諸事物を研究したり認識することに、自己自身を認識し研究することとは別の重要性を与えうるのであるから、こうした基礎的な感覚の報告にも注意を傾ける。―観察者は、感覚という学校で観察者として育っていく。最も奥行きの広い、また最も重要な観察者の教育という分野は、感覚の証言を明らかにし、比較し、修正することから成り立っている。観察者が、自ら高度な知的段階に達し、そこで獲得するあらゆる観念、熟練した観察者の精神が把握し作り出すことのできるあらゆる抽象的概念は、何らかの形で、必ずやその起源の跡をとどめている」（メーヌ・ド・ビラン『人間の身体と精神の関係　コペンハーゲン論考1811年』F.C.T. ムーア校訂・編集、掛下栄一朗監訳、早稲田大学出版部、一九九七年、六頁）。ビランは、視覚と触覚が自然にじかにふれうる感覚であることを示すと共に、観察者がより抽象的な段階に至ったとしても、その根底には自然に触れうるような感覚が存すると論じ、より高度な抽象的認識を下支えする感覚の研究意義を示している。ビランの記述を踏まえると、眼の運動に感覚印象の体系を読み取る抽象的機能を見出しながらも、あくまでそれを感覚印象の予見というきわめて身体的な抽象性で語る、一見矛盾する論をラニョーが描く意図も理解できる。

（27）北岡明佳（2005.2.7）「ツェルナー錯視」http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/zollner.html（二〇二一年一二月一

四日取得）

（28）Jules Lagneau, *Célèbres leçons et fragments*, PUF, 1973, p.166.
（29）*Ibid.*, p.165.
（30）*Ibid.*, pp.165-166.
（31）*Ibid.*, p.167.
（32）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, p.44.
（33）*Ibid.*, pp.44-45.
（34）*Ibid.*, p.77.
（35）Jules Lagneau, *Célèbres leçons et fragments*, PUF, 1973, p166. 同じことは pp.154-155でも言われる。「かりに私が下から見られた角錐台の図を形作る平面のもろもろの線を見るならば、わたしはわたしがそれらもろもろの線が表象する立体感（volume）を形づくる構想にしたがって、凹凸（relief）やくぼみ（creux）を意のままに現れさせる。」（*Ibid.*, pp.154-155.）
（36）Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945, pp.43-44.
（37）*Ibid.*, p.48.
（38）*Ibid.*, p.55, note2.